

石田三成の旗印「大一大万大吉」に見る 《「愛」の政治理念》と政治経済学

——イギリスにおける「公」と「私」の政治経済学との関連で——

前 原 正 美

本論文全体の主張論点としては、石田三成の旗印「大一大万大吉」には《「愛」の政治理念》が示されていること、を明らかにする。本論文の独自の視点としては、第1に、石田三成が依拠した道教＝神道では、地上（天下）の世界は天上の世界の映し絵である、という論点を提示する。宇宙（天上）では「大」＝「太」＝「天」＝「神」は、北極星＝宇宙上の中心に位置する「神」であり、その周りを「八」つの「神」が支えている。地上（天下）では、「大」＝「太」＝「天」＝「神」は伊勢神宮に祀られる天照大神であり、道教＝神道は、北斗八星信仰＝アマテラス信仰＝伊勢（神宮）信仰を創りだした。第2に、三成の九曜文の中央の大丸は北斗＝北極星、八つの丸は北斗＝北極星の周りの八星を示しており、いいかえれば中央の大丸は天照大神、八の丸は「八百万の神」を示している。こうした北斗八星信仰は、道教＝神道を基礎とした平和国家を構築するための政策となった。第3に、三成は、「一」は常に「万」人＝「他」者＝「多」者となつてつながっている、と考えた。そのかぎり人間各人は「愛」に生きるしか幸福になる道はない。かくて三成は、《隣人「愛」＝人間「愛」》に基礎づけられた天下国家を実現できれば、「道徳的世界」と「政治的世界」と「経済的世界」とが調和した「最大数の最大幸福」を実現できる、と考えた。

1. はじめに

人の人生は、《幸福の絶対的価値規準》と《幸福の相対的価値規準》¹⁾とが必要である。《幸福の絶対的価値規準》とは、人間が絶対的存在としての宇宙の意思としてのかぎりない「愛」を《幸福の価値規準》として生きる生き方であり、《幸福の相対的価値規準》とは、人間が自分たちの相対的な（自己と他者との比較による）価値規準（たとえば社会的地位や金銭的収入）を《幸福の価値規準》として生きる生き方である。

1) 本論文における《 》の表記は、前原正美の規定であることを示す。

《幸福の相対的価値規準》のみしか有しない人びとの生き方においては、たとえ他人の人生を踏みにじっても、自分の私的利益の増大を目指すことになりかねないだろう。

それゆえ人の人生には、《幸福の絶対的価値規準》が設定されなければならない。

《隣人「愛」=人間「愛」》に満ちた「道徳的世界」を構築することなしには安定した「政治的世界」は構築されえず、人間一人ひとりが自らの個性=自己能力を生かした自由を経済的利益を追求できる経済的世界の構築もありえない。

その理由は、人の人生にせよ社会にせよ、陰陽の法則=因果の法則が作用するからである。

陰陽の法則=因果の法則とは、①自分が他者や社会に与えたものは自分に返るということ、②人の人生には常にコインの裏表のように「陰」と「陽」が結びついており、③また人の人生には「陰」と「陽」とは繰り返して交互に引き起こされるのであり、④したがって人間「一」人ひとりは見知らぬ「他」者=「多」者=「万」人と結びついているのであり、⑤それゆえ人間「一」人ひとりが幸福になるためには、《隣人「愛」=人間「愛」》を培うしか道はないのである。

2. アダム・スミスとJ.S.ミルに見る「道徳的世界」・「政治的世界」・ 「経済的世界」の調和

アダム・スミスの考えでは、「神」は人間自身にそれぞれの国家の調和の実現を任せている。「神」と「人間」と「国家」との調和は、基本的に人間自身に委ねられている。地上における神の世界は、宗教的世界ではなく、「道徳的世界」である²⁾。

スミスは、宇宙における絶対的価値としての「神」の「無限の愛」=宗教的な「愛」を、国家（地上の社会）における絶対的価値としての「愛」=「有徳」に置き換えて、人間「一」人ひとりの徳の向上を通じて「道徳的世界」を構築することを、イギリスの急務な国家的課題であると主張したのである³⁾。

スミスは、イギリスにおける平和国家の実現のためには、労働者階級における「徳」の向上が急務である、と考えた。その大きな理由は、労働者階級が国家（社会）の大多数の割合を占めるからであり、労働者階級の「徳」=「道徳」の水準が低い状態であると、労働者同士の間、労働者と資本家の対立が激化し、社会的矛盾が現出するからであった。

そこでスミスは、『国富論』において、イギリス国家は大きな費用のかかる①国防と②公

2) アダム・スミスの理神論と「道徳的世界」「政治的世界」「経済的世界」との相互関連性については、高島善哉（1968）参照。また、前原正美（2013）では、アダム・スミスの幸福論を《人生（幸福）の絶対的価値規準》と《人生（幸福）の相対的価値規準》との関連で考察した。アダム・スミスの3つの世界に関する先行研究に関しては、前原直子（2017）31-92頁を参照。

3) 前原正美（1998）参照。

共事業、③ 司法の3つの仕事を公的・国家的「必然的職務」とし、基本的にはこれ以外の仕事は私的・民間の大企業および中小企業に委ねるべきだ、という国家論を展開した。スミスにおける「政治的世界」は、こうした国家論に支えられている。

スミスの考えでは、私的・民間の大企業、たとえば株式会社の社会的発展が実現可能となると、資本家階級の投資意欲が喚起されて、かれらの利己心が十分に発揮されるようになり、社会的生産力は増大し、一国の資本蓄積は著しく促進されてゆく。その結果、労働者階級の就業機会が増大し、雇用労働者＝生産的労働者が増加し、不生産的階級が減少し、貨幣賃金が増大し、労働者全体の利己心が旺盛に発揮されるようになる。

こうした資本家階級の利潤と労働者階級の生活水準が著しく上昇し、両者が利害調和を図りうる国家こそが、スミスの理想とする「経済的世界」である。

スミスは、資本家階級と労働者階級の利己心の発揮を通じて、社会の大多数の経済的利益は増大し、国家（社会）における徳の向上が見られるようになると、政治的に安定した秩序が形成される、と考えたのである。

こうしてスミスの理想的国家は、利己心を起動力とした「経済的世界」→「道徳的世界」→「政治的世界」というプロセスを通じて、実現可能とされるのであった。

これに対して、J.S.ミルは、人間一人ひとりの公共心を起動力とした理想的国家の構築を目指した。ミルによれば、人間には利己心に加えて公共心がある。そのかぎり、人間の幸福は公共心としての人間「愛」を世に施して生きることのなかにあるのである。人間各人は、人生の出発点においては、自らの私的利益の増大を目指したにせよ、そのプロセスにおいて、自らの「愛」の心を発見するに至れば、自らの仕事を通じて自らの「愛」を世に伝えてゆく使命を果たし、自己と他者とを同一視し、「他」者＝「多」者のために自らの「愛」を施してゆける人間へと成長しうるのである。

ミルは、功利主義の最高道徳をイエス・キリストの《隣人「愛」＝人間「愛」》のなかに見いだした⁴⁾。

ミルによれば、人間「一」人ひとりには、自らの「愛」に目覚め、その「愛」を自己愛から個人愛、隣人愛、人間愛へと深く広く培って、できるだけ多くの「他」者＝「多」者のために、自らの仕事を通じて施してゆかなければならないのである。

ミルにおいてもまた、宇宙における「神」の「愛」は、イギリス国家では経済的道徳としての《隣人「愛」＝人間「愛」》に置き換えて考えられ、人間「一」人ひとりには、《隣人「愛」

4) J.S.ミルは功利主義の最高道徳（黄金律）をイエス・キリストの隣人愛のなかに見だし、人間各人は利己心の発揮から公共心の発揮への人間的成長のプロセスにおいて、隣人愛＝人間愛の重要性を認識するに至る、と主張した。ミルの人間的成長の重要性については、前原正美（1998）、前原直子（2013）参照。

=人間「愛」の心を育成するという道徳的向上を目指して生きてゆくことが重要となる。

「神が人間にあらゆる諸能力を与えたのは、それらの能力が育成されて開花させられるためである。……そして神は、人間が自分自身の心に描いた理想的概念に少しでも近づくにつれて、……喜ぶのである」(CWⅩⅧ 263/訳283-84)。

その大きな理由は、人の人生には、《ギブ・アンド・テイク (give and take) の法則》=《因果の法則》の法則が作用するからである。人間各人は「他」者=「多」者に「愛」を施して生きてゆかないかぎり、決して幸福にはなれないのである。そしてミルは、公共心としての人間「愛」に基礎づけられた「経済的世界」→「政治的世界」というプロセスで、イギリスにおける最大多数の最大幸福の実現する理想的国家が構築される、と考えたのであった。

アダム・スミス、J.S.ミルに先がけて、日本では、石田三成が「私」の心を乗り越えて「公」の心としての《隣人「愛」=人間「愛」》の心で生きることの重要性を主張した。

石田三成(1560-1600)は、近江佐和山20万石の城主であり、豊臣「政権」の中心人物として活躍した《「愛」の人》である。

石田三成の旗印「大一大万大吉」は「道徳的世界」と「政治的世界」と「経済的世界」との3つの世界で構成されている。

また「大一大万大吉」の世界は、宇宙=天上の世界と地上=天下の世界とが映し絵となっている世界である。

道教=神道によれば、宇宙=天上では、①「大」=「天」=「神」なる存在は、「太極」神であり、「大」なる「神」としての北斗=北極星である。②「万」とは「八」方に広がる太陽や月などの宇宙全体の「全て」の存在であり、③「吉」とは太陽や月などの宇宙全体の「全て」の調和や繁栄=幸福を意味する。

地上=天下では、これに対応して、①「大」=「天」=「神」(天上の神=天下の神)であり、その分身かつ一心同体となる天照大神=アマテラスオホミカミ=伊勢神宮に祀られる「神」であり、唯「一」とは天照大神の子孫である天皇であり、天皇の代理人としての「一」=天上人であり、②「万」とは、「八百万」の「神」であり、伊勢神宮を中心とする各地の神宮や神社に祀られている「神」であり、③「吉」とは天下「万」民の「幸福」であり、つまりは人間各人=「他」者=「多」者=「万」人の「幸福」である。

3. 道教=神道の政治思想と石田三成の旗印「大一大万大吉」

3-1. 老子の政治思想と「大一大万大吉」

老子の思想に基礎づけられた道教によれば、「大」とは、「太」であり、かつまた「天」で

ある。「大」はまた私の言葉によれば、「宇宙の神」＝「天上の神」であり、「地上の全て」としての「万」物（全ての世界）や「万」人（全ての間人）を支配する「万能の神」である。「大」＝「太」＝「天」＝「神」は、「道」でもあるから、地上の「万」物や「万」人を支配する万能の力を有する。そのゆえに、「大」は地上の「全て」の存在に絶大なる力を及ぼし、地上の「万」物や「万」人＝「全て」を調和に導く「万能の神」である。

いいかえれば、私説では、「大」＝「神」は、完全かつ絶対的存在であり、「無限の愛」なる存在であり、常に人間とともに在って、人間「一」人ひとりを幸福の方向に導いて、すなわち人間「一」人ひとりが社会における多くの者＝他者と調和する方向に導いて、人間同士がお互いの「愛」を施しあう方向へ導くとともに、「万」人＝「全て」の間人と「万」物の存在（山や川などの大自然や動物、植物たち全ての生き物、存在）とが調和するように導くのである。「大」＝「太」＝「天」＝「神」は「道」であるから、全宇宙へと大きな広がりをもってつながっており、全宇宙の「全て」の存在（「万」物「万」人）を支配する。「万」人や「万」物は「全宇宙の偉大なる神」＝「全宇宙の偉大なる意思」＝「全宇宙の無限なる愛なる存在」に導かれている。

三成は、藤原鎌足、不比等の子孫であり、特に不比等の政治思想を受け継いだ。藤原不比等は、持統天皇にその才能を見いだされ、一気に頭角を現して出世した人物である。

不比等の政治思想との関連でいえば、不比等は、安定した政治体制を構築し、持統天皇の権力を高めるために、持統天皇とともに（あるいは持統天皇の権力を使用して）、天照信仰＝伊勢（神宮）信仰を創りだした。

「大」＝「太」＝「天」＝「神」は、「宇宙」＝「天上」では、北斗八星という形（姿）で自ら存在を示している。北斗八星の中央には、「大」＝「大一」＝「太（＝太極）」＝「北極星」＝「神」が位置し、その周りに「八」つの星座＝天使（御子）が連なっている。これらの「八」つの星座＝天使は「大」＝「大一」＝「太（＝太極）」＝「北極星」＝「神」と一体化した分身であり、その意味で「神」である。

宇宙＝天上の「大」＝「太」＝「天」＝「神」は、自らの存在として北斗八星を地上に表現した。地上の「大」＝「神」を「天照大神」と名付けるとすれば、地上における「大」＝「神」の代理者は、唯「一」の存在としての天皇として位置づけることができる。要するに、「大」＝「大一」＝宇宙の「神」＝天上の「神」の名を「天照大神」と名付けるとすれば、その神は地上では伊勢神宮に祀られている、というのである。

いいかえれば、地上においては、伊勢神宮に祀られる「天照大神」という「神」は、その代理人としての唯「一」の存在としての持統天皇である、というのである。したがって、持統天皇は、「大」＝「大一」＝「天」＝「神」の代理人であり、地上では神の分身である。

こうして不比等は、持統天皇を天照大神の代理人とすることによって、持統政権を強化し、

政権の安定化を図ったのである。そして、持統天皇の死後、持統天皇には和風論号として「高天皇尾広野姫天皇」が送られて、地上の天照大神＝アマテラスオホミカミなり、神格化された⁵⁾。

3-2. 老子の思想⁶⁾＝道教と吉田神道

日本では藤原不比等の時代に教示された老子思想は、道教として発展し、道教はさらに神道（＝「神」＝「道」）として発展し、室町時代の後期に登場した「吉田神道」によって、よりいっそうの発展を見た。

「吉田神道」とは、天皇および朝廷の神の祭祀を執り行ってきた吉田兼俱（よしだかねとも うらべ卜部氏）によって創出された新たな形での道教である⁷⁾。吉田兼俱は、1486（文明18）年の著書『神道大意』の冒頭において、道教＝神道の大意をつぎのように説明した。

「そもそも神とは、天地に先だって天地を定めたものであり、陰陽に超越して陰陽を作りさす存在である。天地においては「神」といい、万物においては「靈」といい、人においては「心」という。ゆえに神とは天地の根元であり、万物の靈性であり、人間の運命である。形なくして形あるものを養うは「神」である。神の五臓に宿っては五神ともなり、それぞれの臓器を守る。ゆえに「神」を「タマシイ」とよませるのである⁸⁾。

兼俱のこの大意には、道教＝神道の極意が端的に示されているが、前述の「大」＝「太」の説明と関連づけて、私の言葉でいえば、重要なことは、①宇宙には、「大」＝「太」＝「天」＝「神」が存在すること、②この天上の「大」なる「神」は、「地」上と全ての「人」とを支配する存在であること、つまり「天地人」の政治思想——「天」と「地」と「人」とで一つの構成体であるという考え方——が示されており、③その際、「大」＝「太」＝「神」は、自分自身は「陰陽を超越して」（陰陽の法則に支配されずに、遂にその法則を自由にあやつって）、それゆえに「陰陽を創りだす」地上の「万」物「万」人に対して、陰陽の法則を作用させる「万」能の力を有する存在であり、④かつまた、「大」＝「太」＝「神」は、人間一人ひとりの心のなかに共に在り、つまり万人のなかには「靈」＝「魂」という形で共に在って、それぞれの「心」の度合い（「私」の心がどの程度において作用し、公の心＝人間「愛」の心がどの程度において作用しているか）を見極める「万」能の力を有し、そのゆえにそれ

5) 倉本（2017）67頁。

6) 老子の思想と石田三成の関連性についての研究は、前原正美（2018b）237-259頁を参照。

7) 伊藤（2012）161頁。

8) 伊藤（2012）163頁。

ぞれの「一」つひとつの存在、「一」人ひとりの存在に対して、「陰陽」の法則を作用させることができる、ということである。

いいかえれば、ここで重要なことは、宇宙には「大」なる万能の「神」が存在し、その「天」＝「神」の使命は、地上の全ての存在＝万物万人を幸福へと導くことであり、そのために「大」＝「神」は「陰陽」の法則を作用させる、ということである。

この大意＝極意を見れば、藤原不比等の道教＝神道に基礎づけられた政治思想の大筋を理解することができるし、またこの「吉田神道」以後に登場した石田三成の政治思想の大筋を理解することができる。

重要なことは、「大」＝「天」＝「神」は、①「一」なる存在としての天皇や天下人とつながっている、ということ、②「万」＝「万」物＝「全て」（＝「万」て）の大自然とつながっている、ということ、③あわせて「万」＝「万」人＝天下「万」人＝人間「一」人ひとりを「吉」＝「幸福」の方向へと導いている、ということである。

その上で「大」＝「天」＝「神」は①「一」なる存在が「陰」＝「悪」と「陽」のどちらの心のほうが大きいのか、②天下「万」人＝人間「一」人ひとり、それぞれに「陰」＝「陽」のどちらの心のほうが大きいのか、容易に認識し、③それぞれの人間「一」人ひとりを「陰」＝不幸、「陽」＝幸福のどちらかに決定する、と考えてよいだろう。

3-3. 「一即多」「多即一」の禅思想と「大一大万大吉」の政治経済思想

禅宗の「一即多」・「多即一」の思想は、《「積善」思想》と共通した考え方を有している。「一」人としての自分は、「多」くの先祖、両親から生みだされた存在である。「一」は「多」によって生みだされる。また、「一」人としての自分は、子ども、孫、ひ孫と「多」くの子孫を生みだす可能性がある。人間は「一」人であるようであり、常に決して「一」人ではない。見えざる「他」者＝「多」者に感謝しなければならない。

自分＝「一」人は、幾「多」の過去の時代を経た現在という時代に生みだされた。「一」＝自分は、なぜ「現在」という時代に生みだされたのか、を考えてみなければならない。「一」＝自分は、「現在」という時代に生みだされなければならない大きな意味がある。

豊臣秀吉は、信長との出逢いがなければ、天下人とはなりえなかったであろう。信長は、身分を問わず、各人の能力を生かそうと考えた。石田三成も然りであった。

三成は秀吉との出逢いによってこそ、三成たりえたであろう。秀吉は、長浜城主になった時に、三成を採用した。三成は若くして登用されて、愛を説くことができた。三成は、秀吉の成長期に出逢い、絶頂期に登用されて、自らの頭角を現していった。それによって、三成は、①秀吉を通じて利己心を発揮し、②自らの個性＝自己能力を著しく高めてゆくなかで人間的に大きく成長し、重職に就いて、日本全体（社会全体）を見渡す立場となった。その

結果、三成は「公」としての使命に目覚め、しだいに「私」欲をなくすことの重要性に気づいて、さらには《「公」の心＝「愛」の心》を前面に押しだして、「私」心を抑制して生きることの重要性を認識・自覚するに至ることができた。それはひとえに、秀吉の存在のおかげであり、つまりは「大」＝「天」の配剤によって秀吉をはじめとする「他」者＝「多」者が「一」＝自分を生かしてくれたおかげである。そのゆえに、三成は、「一」＝自分を生かす存在は、相対的視点に立脚すれば、「他」者＝「多」者であることを発見し、逆にいえば、「一」＝自分を生かすためには、「他」者＝「多」者に貢献すること、善意をもって接し、善行を振舞うことの大切さを認識するに至ったのである。

その結果、三成は、「一」＝自分の生命（存在）と「他」者＝「多」者の生命（存在）との価値を同等とみなすようになった。なぜなら、「他」者＝「多」者が「一」＝自分の生命（存在）を生かしてくれてこそ、「一」＝自分は存在しうるとははっきり認識できたからであった。

たとえば、七将事件では、他者が自分を助けてくれた。そして三成は、その時、「これらの者（自分と生命をわかちあい、愛をわかちあえる者たち）のためには、自らの「一」人の生命を犠牲として投げだして、そしてまた同じ時代に生きる「他」者＝「多」者のために自分の生命を差しだして生きることを決意したのであった。その時、三成の「一」人の生命は「他」者＝「多」者の生命と完全に重なった。

かくて三成は、「一人が万人のために、万人が一人のために生命を注ぐこと」の意味内容が、つまり、人間「一」人ひとは常に天下「万」民とつながっていること、そのことが「大一大万大吉」の旗印に込められていることを悟ったのであった。人間の生命とは、自らの個性＝自己能力であり、同時にまた人間の生命とは時間である。人間は皆、定められた有限の時間のなかでしか、生きられないのである。

信長を引きあいにはじめ、いつの頃からか信長は常に「人生、五十年」という言葉を発しはじめた。ことあるたびに信長は、「敦盛」を舞いつつ、「人生、五十年。下天のうちにくらぶれば、夢幻の如くなり」と表現するようになった。おそらく信長は、言葉が天に伝わり、天との意思疎通を図ることによって、自らの生命が五十年であるということを知っていたにちがいない。

三成は自分の時代で天下万民のための天下泰平の世を構築することによって、つぎの時代へと平和を受け渡していきたくかったのである。その意味で、三成は、自分（三成）の「一」人の生命が「多」者＝他者＝次代に生きる数多くの人びとにつながってゆくことを、明確に認識・自覚していたのである。

「即」の思想は、2つの真理で成立している。ひとつは、「一即多」であり、いまひとつは「多即一」である。このことは、「一」人は「万」人＝「他」者＝「多」者とつながっていることを意味するが、同時にまた「一」人は「万」物とつながっていることを意味する。前者

については、すでに考察したので、以下では、後者について考察する。

「多」を「多」者＝「他」者＝「万」人という意味として解釈すれば、「一」人とは、即、「万」人とつながっていることを意味する。

たとえば、「一」人＝自分が「多」者＝「他」者＝「万」人に善意を施すとそれが自分に返ってくる、と説く。逆は逆である。このことは、《「積善」の政治思想》⁹⁾に完全に符合する。石田三成は、敦賀藩領主の大谷吉継の窮地を救ったことがあった。そのこともあって、大谷は、関ヶ原の合戦では、三成のために生命を投げだして戦った。

禅宗は、「天」とか「神」という概念を持たない。禅宗の教えは、ただ自分の存在を「他」者＝「多」者＝「万」人につながっていること、逆にまた「他」者＝「多」者＝「万」人の存在は、自分という「一」人につながっていることを説く。その大きな重要性のひとつが、いかなる存在が自分の言動を見ているのか、何かの存在が自分の心のなかや言動を知らないかぎり、「積善の思想」は成立しえず、したがってまた、「因果の法則」は作用しえないということである。したがって、禅宗のように「天」や「神」の概念を持たないとしても、結局は、人の人生においては、「見えざる手」が作用する、という認識に到達することになる。

「大」＝「天」＝「神」の存在が登場しない禅宗の教義においてでさえも、「一」人は「万」民とつながっていることの認識が重要とされていることに、三成は、大きな学びを得た。しかるに、三成は、禅宗の教義を超えて、道教＝神道、浄土宗や浄土真宗、さらにはキリスト教の教義などを通じて、「大」＝「天」＝「神」の存在を認識していったのである。

4. 石田三成の旗印「大一大万大吉」に示される 《「愛」の政治理念》と《「愛」の政治思想》

4-1. 石田三成の政治思想と政治経済

「大」＝「太」＝「天」＝「神」は、常に「一」とも「万」とも「吉」とも「全」て（＝「万」て）とともに在る。「一」とは、天皇であり、天の代理人としての天下人のことであるが、事実上の天下人豊臣秀吉にとっての重要な使命は、国家の安定（平和）である。秀吉にせよ、三成にせよ、公武合体論者である。「公」儀＝豊臣「政権」の最高責任者としての天下人秀吉、そして「万」機＝豊臣「政権」を担う三成にとって、「武」力＝軍事の問題は、国家の方向性を考えるうえで、極めて重要な問題である。

1592（天正20）年正月5日、秀吉は朝鮮出兵（文禄の役）を諸大名に命じた。4月12日、第1軍の小西行長軍は、1万8700人にのぼる大軍を率いて渡海し、4月13日には、釜山城を攻撃し勝利した。

9) 《「積善」の政治思想》について詳しくは前原正美（2012）以降の一連の石田三成研究を参照。

第2軍は加藤清正、鍋島直茂らが2万8800人を、第3軍は黒田長政、大友義統らの1万1000人、第4軍は島津義弘が1万4000人、第5軍は福島正則の2万5000人、以下、第6軍は小早川隆景、毛利秀包、立花宗茂らが、第7軍は宇喜多秀家らが、第8軍は浅野幸長らが、第9軍は豊臣秀勝らがそれぞれ兵1万人前後を率いて朝鮮半島に上陸し、あわせておよそ16万人の豊臣軍（日本軍）が戦闘を開始した¹⁰⁾。

朝鮮に出兵した諸大名は西国の諸大名であり、秀吉が危険人物とみなしていた徳川家康、伊達政宗、また家康や政宗と対立する前田利家、上杉景勝、佐竹義宣、真田昌幸らの東国および東北の諸大名らは、予備軍として肥前名護屋城にて待機した。

ここに朝鮮出兵は、天下の主要諸大名を総動員した大がかりな朝鮮および明国との戦争であることが明白となる。留意すべきは、天下人豊臣秀吉自身が小西行長、加藤清正、福島正則らの子飼いの大名たちを主力の戦力としていることである。すなわち、秀吉は、これらの諸大名が容易に朝鮮軍に勝利し、明国にまで進軍できると考えていた、と予想してよいであろう。

したがって、秀吉は、小西行長、加藤清正らの西軍諸大名に朝鮮半島で領地を増し、さらにはより高い地位を与えて、これらの大名の功名心＝利己心を満たし、あわせて徳川家康、伊達政宗らの豊臣「政権」下での相対的地位を低下させようとする意図があったのだろう。

しかし、現実には、朝鮮国王を逃亡させるなど、豊臣軍（日本軍）の快進撃は最初だけのことであり、7月には明の援軍が加勢してきたことによって、豊臣軍（日本軍）の士気は次第に低下していった。

三成は、一戦して勝利し即座に撤退する、という構えであったが、豊臣軍（日本軍）が予想よりも早く苦戦に陥ったため、秀吉に内密で小西行長らと明国との講和条約の交渉を始め、停戦に成功した。その結果、三成は、大阪城に秀吉と明国の使節との謁見の場の設定に成功した。したがって三成は、すでに秀吉の命令に従っておらず、天の意思に従って行動している。秀吉は、自分の主張した講和条約の内容が拒否されていることを知って激怒し、2度目の朝鮮出兵（慶長の役）を命じたのであった。

私説では、この秀吉と明国との講和条約の不成立によって、石田三成は自らの心のなかで秀吉との決別を決定した、との見解を主張する。もとより、三成は、老子の思想に基づけられた道教＝神道の信奉者であり、「大」＝「太」＝「天」＝「神」と心を「一」つにして、一心同体となって生きる人物である。三成の考えでは、「大」＝「太」＝「天」＝「神」こそが、地上における「全て」（＝「万て」）の生命の使い方（使命）を決定するのであり、秀吉「一」人が朝鮮・明国という「他」国（＝「多」国）との和解を「受け入れない」という

10) 五味文彦（2017）302頁。

表 陰陽の法則＝因果の法則に見る豊臣秀吉と石田三成の人生の陰陽

	年号	事項	豊臣秀吉	石田三成	陰陽の法則・因果の法則				
秀吉の運気上昇期	1582 (天正10)	本能寺の変	小牧長久手の合戦で、秀吉は家康に勝利できず(陰)、妹の朝日姫を家康の正妻に迎えてもらい、家康を傘下に置いた。秀吉は、《「大」の政治思想》にもとづいて、天意に従って自己犠牲のもとに自らの「公」の心＝人間「愛」の心を示した。秀吉は、大坂城を拠点とした豊臣「家」による豊臣「政権」を樹立した。1588年、聚楽第に後陽成天皇を迎え、公武合体のもとに平和国家の実現を目指すことを宣言。1590年には天下を統一した。ここに秀吉は天下人になり、人生の頂点に上りつめた(陽)。	石田三成は、老子の思想に基づく道教を学び、かつまた藤原鎌足・不比等以来の《「積善」の思想》を受け継いで、陰陽の法則＝因果の法則を学びとった。その結果、三成は自らの旗印に示される政治「理念」は愛の政治「理念」である、と認識した。三成は、大きな政治的転換、つまり天下人の高い政治「理念」による平和国家実現を目指した。すなわち三成は、《「一大万大吉」の政治思想》にもとづいて政治を司ることとなった。	秀吉は、家康との武力対決において敗北した(陰)。しかし秀吉は天下人となった(陽)。小牧長久手の戦いは、秀吉、三成、家康の人生において、それぞれにも重要な合戦となった。秀吉は、武力を背景としつつ、政治によって天下に采配を振るう道があった。三成にすれば、秀吉が天下万民に自らの《「公」の心＝人間「愛」の心》を示せば、豊臣「家」による豊臣「政権」は、長期政権を実現できるであろう。秀吉の武力敗北(陰)は、豊臣「政権」が大きな支持(陽)を得る可能性を有していた。				
	1583 (天正11)	山崎の合戦、清州会議							
	1584 (天正12)	大坂城築城着手							
	1585 (天正13)	小牧長久手の戦い							
	1586 (天正14)	秀吉・関白就任							
	1587 (天正15)	四国平定							
	1588 (天正16)	豊臣秀吉と改姓(豊臣賜姓)							
秀吉の運気下落期	1591 (天正19)	九州平定(島津氏服従)	陰陽の思想(道教)に従えば、人の人生も社会の動向も、陰陽の事象が繰り返して生じる。天下人秀吉(陽)の先行きに暗雲が襲い始めた。第1次朝鮮出兵では、秀吉軍(日本軍)は1年もしないうちに敗戦がした(陰)。朝鮮出兵後、母の政所(大政所)の病死、秀長の病死、鶴松の病死と豊臣「家」に不幸が続いた(陰)。秀吉は、待望の秀頼が誕生(陽)すると、利休事件、秀次事件を起こした。第2次朝鮮出兵は、豊臣「家」と豊臣「政権」に対する批判(陰)を引き起こし、秀吉は自らが撒いた種を自ら刈り取ることとなった。	三成は、平和国家の実現のためには、天下人秀吉の「公」の心＝《人間「愛」の心》の発揮こそが重要である、と考えた。しかし秀吉は、秀頼誕生後、秀頼一人を溺愛するあまり、天下万民＝他者＝多者を犠牲にした悪政を行うようになった。しかも秀吉の朝鮮出兵に反対する三成派の諸大名と清正や正則らの武力派の諸大名とが激しく対立をした結果(陰)、政治の主導権を徳川家康が握った(家康にとっての陽)。	秀吉は、秀吉の「公」の心＝人間「愛」の心＝「幸福」の実現のために与えた人物であった。人と人の出逢いは、偶然ではなく必然なのであろう。良かれ悪しかれ、人はすべての事実を避けて通ることはできない。三成の使命は、一言でいえば、秀吉が「私」心＝私「欲」に満ちた政治を超えて、どこまでも「公」の政治を実行するように「大」＝「天」に代わって導いてゆくことにあった。その意味で、三成は、天に仕える人物だった。				
	1592 (文禄元)	豊臣秀吉の地位を譲り、太閤となる。秀長病死(52歳)、利休事件、鶴松病死(3歳)							
	1593 (文禄2)	人掃令、第1次朝鮮出兵(文禄の役)、大政所(秀吉母)病死、秀勝(秀吉の甥)朝鮮で病死(24歳)							
	1594 (文禄3)	石田三成、小西行長を中心に明との和平交渉、8月秀頼誕生							
	1595 (文禄4)	明との和平交渉の決裂(秀保(秀長の養子)変死(16歳))							
	1596 (慶長元)	秀次事件(秀次自害)							
	1597 (慶長2)	第2次朝鮮出兵(慶長の役)							
	1598 (慶長3)	秀吉死去							
	豊臣家豊臣政権崩壊	1599 (慶長4)				前田利家死去。	秀吉の死後、加藤清正、福島正則ら七将は(陰)は、三成ら(陽)と対立し、家康を奉じて、新たな「政権」樹立を目指した。その結果、三成派対家康派という武力対決(陰陽)に至り、三成の死によって豊臣「家」と豊臣「政権」は、事実上、崩壊の一途を辿ることとなった。	秀吉の「負の遺産」を受け継ぐ結果となった三成は、関ヶ原の合戦で敗北した(陰)。しかし、三成は、結として徳川の平和国家の実現のために大きく寄与、見事に自らの使命を果たすこととなった(陽)。	秀吉の道徳性の欠如＝人格の低下(陰)は、豊臣「家」と豊臣「政権」との崩壊の道(陰)を創りだした。清正・正則はお家断絶、小早川秀秋は謎の死を遂げた。秀吉が社会に与えたものが、秀吉に返った。
		1600 (慶長5)				七将による三成襲撃事件(七将事件)、三成の奉行職、毛利輝元は7月17日付で宇喜多秀家、前田玄以、長束正家、増田長盛らが連署した家康弾劾状「内府違ひ13カ条」を天下の諸大名に送付。三成は「公」儀として挙兵できた(陽)。			
総括		秀吉の人生は、長期的には10年前後の周期で陽と陰が繰り返している。	秀吉の《「公」の心＝人間「愛」の心》の欠如が豊臣「家」と豊臣「政権」の崩壊につながった。	三成は《「愛」の理念》に従って生きることの大切さを世に伝えた《「愛」の人》であった。	人間各人は《「公」の心＝人間「愛」の心》を培うことが唯一の幸福達成の道である。				

ことであれば、もはや秀吉は、天意としての天下万民のために《「公」心=人間「愛」の心》、したがってまた、天に与えられた使命を拒否する存在であることになる。三成の考えでは、そのかぎり秀吉は「私」心としての自己利益=私的利益しか考えない愚か者へと転落したと「大」=「天」に受けとめられるであろう。

それゆえ私説では、第1次朝鮮出兵（文禄の役）において朝鮮・明国との和解内容を豊臣秀吉が拒否した時点において、石田三成は秀吉と袂を分かち決意をし、この和平交渉の決裂以後はたとえ秀吉の意思（命令）に背くことになったにせよ、「大」=「天」とともに生きる覚悟を定めた、と主張する。

三成にすれば、天下人秀吉にとって最も重要なことは、「大」=「天」の意思に従って「公」としての心=人間愛の心をもって天下万民の幸福の実現のために貢献する、という「政治理念」を示し、その理念に従って自らに与えられた使命を果たしてゆくことにある。事実、秀吉は、豊臣姓を名のり、聖徳太子の《「和」の政治理念》を継承し、「天地長久万民快樂」を自らの「政治理念」とすることを明言していた。

三成の考えでは、朝鮮半島で戦争（合戦）の主力となった行長、清正、正則らの秀吉の子飼いの大名、そして島津義弘、小西隆景らの西国諸大名は、自費で戦費を調達したが、戦争が長期に及べば、兵の死者が増大するばかりか、戦費は膨大な費用となり、自らの領民に増税を課すことが余儀なくされる。その一方で、家康、政宗らはこうした自己犠牲を支払わずに、自らの戦力を維持することができるのであった。

したがって2度に及ぶ朝鮮出兵（1592-1598）は、秀吉の直々の配下の豊臣「政権」の道徳的一体感を著しく阻害した。とりわけ2度目の慶長の役（1597-1598）は、小西行長、宇喜多秀家らの諸大名およびかれらの盟友たち（上杉、大谷ら）が盟主とした三成派と、秀吉の血統上の一門である加藤清正派の福島正則らとその盟友たち（細川忠興ら）が盟主とした家康派との2つの大きな政治勢力の対立を加速し、秀吉を中心とする豊臣「政権」の土台を弱体化させることとなった。

加えて、1593年、秀吉と淀君とのあいだに秀頼が誕生したことにより、秀次事件などが発生し、秀吉の「私」欲に満ちた政治は加速していった。かくて、秀吉と決別を決意した三成は、表面では秀吉の意思に従う秀頼の豊臣「家」と自分（三成）を中心とした新たな豊臣「政権」の構築を企図し始めたのであった。

したがって、当然、「大」=「天」の意思に従って《「公」の心=人間「愛」の心》を貫いて、天下万民のための天下泰平の世を築く使命を貫こうとする三成と「私」の心=私利私欲の心に自らの心を埋没させてしまった天下人秀吉に忠義を貫こうとする清正とは、第1次朝鮮出兵（文禄の役）を契機として対立していったのである。

いいかえれば、「大」=「太」=「天」の意思→天皇の代理人としての天下人秀吉による

天下万民のための政治→三成を中心とした「公」儀＝豊臣「政権」による天下万民のための政治→天下万民＝最大多数を占める大衆（百姓、商工業者など）の幸福実現という政治構図のなかでの平和国家の構築は、天下人豊臣秀吉「一」人の天意に反した不徳の政治、「私」心に満ちた強欲の政治の施行によって崩壊の一途を辿り始めることとなった。

したがって、①《「大一」の政治思想》に伴う「大」＝「太」＝「天」の意思に反した天下人秀吉による「道徳的世界」の崩壊の加速は、②《「大万」の政治思想》に伴う「政治的世界」＝天下万民のための「公」の政治の崩壊をも加速せしめ、さらには、③《「大吉」の政治思想》に伴う「最大多数の最大幸福」＝天下万民の「一」人でも「多」くの「他」者＝「多」者＝「万」人の生活を豊かにするという「経済的世界」の崩壊をも加速させていった。

だからこそ三成は、天下人秀吉による《「愛」の政治理念》（原因）こそが天下万民のため天下泰平の世＝平和国家を創りだす（結果）、と考えたのであった。

4-2. 「大一」の政治思想と「道徳的世界」

「大一」の世界は、天下人が自らの「公」の心＝人間「愛」の心を天下万民の「吉」＝「幸福」のために施すことが最も重要であると考えた「道徳的世界」である。

石田三成は政治理念を大切にされた。三成にとって、政治理念とは、自らが生きるための政治的信念である。「人は一体、何のために生きるのか」という人生の価値は、人間「一」人ひとりがそれぞれに決定するものではなく「大」＝「太」＝「天」＝「神」が決定するものである。

人生の価値は、人間「一」人ひとりがお互いの個性＝自己能力を生かして他者のために、そして社会のために貢献すること、ひいては自らの仕事を通じて家族のために、他者のために、社会のために自らの「愛」をより広く施してゆくこと、にある。一言でいえば、人生の価値は、人間「一」人ひとりが自らの人間としての「愛」＝《隣人「愛」＝人間「愛」》を「他」者＝「多」者＝「万」人のために自意識をもって降り注いでゆくことであり、そこに「大」＝「太」＝「天」＝「神」が人間「一」人ひとりに与えた使命があるのである。

人間「一」人ひとりが他者＝多者のために自分自身の個性＝自己能力、そして自分自身の「愛」を施してゆけばこそ、人間「一」人ひとりには「吉」＝幸福に到達することができるのであり、社会全体もまた幸福の度合いを高めてゆくことができるのである。

人間「一」人ひとりが、「他」者＝「多」者＝「万」人のために貢献すれば、いずれは「他」者＝「多」者＝「万」人もまた自分「一」人のために貢献し、そうしてお互いのために貢献しあう時、お互いの幸福＝調和が達成されることになる。

人間「一」人ひとりが、こうして「他」者＝「多」者＝「万」人のために貢献しないかぎり、人間「一」人ひとりが決して幸福になることはできないのである。その理由は、人の人生に

は、仏教的・神道的にいえば「因果の法則」が作用するからであり、かつまたキリスト教的にいえば、(the Law of Give & Take) が作用するからに他ならない。

石田三成の旗印「大一大万大吉」には、全体としては①「大」＝「太」＝「神」は、「愛」なる存在であり、唯「一」の存在としての天皇、その代理人としての「一」なる存在としての天下人は、天下万民に自らの「愛」を降り注ぐ使命を担っていること、②「万」機＝「公」儀は、天下万民の生命と生活を保障する使命を担っていることが示されている。③「人間」一人ひとりとは「他」者＝「多」者＝「万」人となつてつながっているがゆえに、「人間」一人ひとりのために、自らの「愛」を施し、お互いに支えあい、助けあって生きてゆけば、すべての人間が「吉」＝幸福に到達できることが示されている。④したがって人間「一」人ひとりが幸福となり、「万」人＝社会が幸福となるためには、人間「一」人ひとりが「愛」の心を培って公共心に満ちた存在への成長することが示されている。すなわち利己心に満ちた人間から公共心に満ちた人間へと人間的に自己を改善してゆくことが大切であるという《「愛」の政治理念》が示されている。

かくて、石田三成の政治理念は《「愛」の政治理念》である、ということが出来る。政治家としての石田三成は、天下人豊臣秀吉の側近中の側近として、豊臣政権の中樞の座にあった。「万」人の集合体としての社会＝国家の平和と人間「一」人ひとりの幸福を実現する使命を担っていた。

三成は、豊臣政権の政治体制は、藤原不比等の政治体制を模範として、それをさらに手直し(改善、改良)することによって平和国家を実現しうる、と考えたのであった。三成は、藤原不比等の政治を豊臣「政権」に摂取し、安定した政権、そして平和国家を構築しようとしたのであったが、具体的には、三成は、①天皇制、②摂関政治、③姻戚—平和的権力の取得、④「家」の構築などについての不比等の政治を受け継いで、中央集権国家の構築を目指した。

天下人となった豊臣秀吉は、「大」＝「太」＝「天」＝「神」が定めた唯「一」の存在としての国家の統治者「天皇」の代理人として政治を司ることとなった。

具体的にいえば、第1に、「大」＝「太」＝「天」＝「神」の代理人としての地上における事実上の天下人＝為政者であるから、《「公」の心＝人間「愛」の心》をもって天下万民の「幸福」の実現のために全力を尽くしてゆかなければならない。いいかえれば天下人豊臣秀吉は、できるかぎり個人的な「私」心を捨てて、つまり自分の私的な利益の増大や権力の増大を得ようとする「私」の心を乗り越えて、天下万民の生命と私有財産と生活を保証し、安定した平和国家を構築してゆかなければならない。

天下万民の大多数は領民にある。したがって、天下人秀吉は、天下の諸大名(武家)に命じて、具体的には全国各地の隅々の農民、商人などのいわゆる「大衆」が安定した生活を営

めるように政治を司ってゆかなければならない。領民の生活が苦しくなり、食べることが困難になってゆくと百姓一揆が起きたり、領主（大名）に勝る反乱が起きたりして、時に武力を使って社会的混乱を収拾しなければならなくなるだろう。

事実、秀吉は、佐々成正を熊本藩25万石の領主（大名）に任命したが、成正が領民たちと争いを起こしたため、百姓一揆が起きて、社会的混乱が生じた。そのため、秀吉は、成正を成敗し、切腹させて責任をとらせた後、加藤清正を熊本城主として任命した。

また熊本藩の隣国の宇土藩25万石の領主（大名）には、小西行長を任命して、キリシタンたちの反乱が起きないように配慮した。さすがに秀吉は、優秀な人材を適材適所に配置し、全国各地の領民の生命と生活の安定を重視した政策をとった。

したがって、第2には、天下人秀吉は武家の統領である大名との融和を図り、安定した豊臣「政権」を構築することが重要となった。その事例の一つを挙げれば、秀吉は、大坂城を豊臣「政権」の拠点とし、北条氏直の小田原城を落とし、事実上、天下を統一した後、北条氏直の領地200万石を徳川家康に与えることを決定したが、これは秀吉の見事な政治的措置であった、ということができよう。

秀吉自身、天下統一の直前、北条氏直に対して、「天道の正理に背いて、帝都に奸謀を企てている」¹¹⁾ゆえに、制裁する、と天下に名言した。

秀吉は、豊臣「政権」にとって最大の危険人物であった徳川家康を三河から関東へと配置換えとすることによって、天皇と公家たちの拠点である京都、そして大坂城を拠点とした秀吉の本拠地から家康を遠ざけることに成功した。

さらに秀吉は、蒲生氏郷の死に伴い蒲生氏の領地30万石を三成の盟友・直江兼続に与え、また上杉景勝の領地を120万石へと加増し、さらには信州の真田昌幸を上杉家の配下に位置づけるなどして、関東250万石の領主（大名）となった徳川家康と奥州100万石の領主（大名）伊達政宗の反豊臣秀吉の可能性のある武家を平和裏に完全包囲することに成功した。これらの事実は、秀吉が天下人に十分な資質を有していたこと指し示している。

すでに秀吉は、総無事令を發布し、大名同士の戦いを「私」戦とみなし、万一、総無事令に反して大名同士が合戦に至ったばあいには、「公」儀＝豊臣「政権」が強大な「武」力をもって成敗する、という姿勢を示した。

平和国家の実現を目指す天下人の秀吉自身が直々に国内における合戦の可能性が生じた時には、「公」儀の武力をもって鎮圧する、という言葉が発したことは、「大」＝「太」＝「天」＝「神」の意思と完全に符合するものであった。

しかし、陰陽思想＝道教＝神道に従っていえば、こうした秀吉のいわゆる「善」政は、

11) 北条氏に対する5カ条の宣戦布告状のうちの第5条にての秀吉の言葉。

この時点ではまだ人の眼には見えないが、「悪」政とつながる原因（要因）を生みだしつつあったのである。その原因の大きなひとつは、事実上、国内における「武」力闘争が消滅してしまったために、「武」力を担う武将たちが戦争で敵に勝利して出世するという「私」欲としての利己心のはけ口が国外へと向いてしまう結果を生みだしていったということである。

戦国時代の武将たちの人生の目標は、それぞれに戦争で手柄をあげて、主君（大名）に認められ、高い評価を受け、加増による収入（経済的利益）の増大、出身による名誉（政治的利益）の増大を通じて、自らの「私」欲としての利己心＝功名心を満たすことにあった。

しかるに、国内において戦争の可能性がなくなるということは、戦国武将たちにとっては、経済的利益や政治的利益の増大の可能性が消滅してゆく、ということに他ならなかった。

このことが、天下人豊臣秀吉の朝鮮出兵の可能性を現実化してゆく大きな要因のひとつとなったことは明らかであろう。

さて、いまひとつの大きな要因は、徳川家康という人物の動向にある、ということが出来る。家康は、今川義元の人質の境遇を、1560（永禄3）年の桶狭間の合戦によって解放された後、織田信長に従軍し、その能力を存分に引きだされつつ、仕え抜いた。家康が信長に解放されたのは、1582（天正10）年の本能寺の変によってであった。

が、信長の後継者としての地位と立場を得た秀吉は、大坂城に拠点を置いて天下人を目指し、家康と対峙した。1584（天正12）年、小牧長久手の戦において、秀吉と家康は直接の武力対決を試みたが、局地戦で家康が勝利した。秀吉は再び家康との合戦による決着を図ったが、大地震が起きて兵を動かせなくなったため、家康との和解の方法を企画した。しかるに、秀吉は、妹の朝日姫を家康が正妻として迎え入れることに賛同したため、平和裏に天下人の地位に就いた。

かくて秀吉は、一方では、家康を配下の大名とすることに成功したが、他方では、家康の政治的立場を大きく押し上げる結果となった。そして、秀吉は、家康に対して関東に大きな領地を与えてしまったのである。

家康にすれば、秀吉の強大な政治力に押される一方であったが、見方を変えれば、家康は秀吉の要求のほぼ全て（＝万事）を受け入れた。このことは、家康の天下泰平の国家の実現を祈る器量の大きさを存分に示している、といえよう。

秀吉は、平和国家の実現に向けて、自己犠牲を払いつつも、自らの「公」の心としての人間「愛」の心を「大」＝「太」＝「天」に示したが、家康もまた秀吉と同様に自らの「公」の心としての《隣人「愛」＝人間「愛」》の心を示したということができる。

しかし、秀吉にすれば、将来における家康の天下人としての可能性を十分に残してしまう結果となったのである。総じていえば、秀吉の天下人への就任という原因は、ひとつには、加藤清正（熊本25万石領主）、福島正則（清州30万石領主）をはじめとする武力派の朝鮮出

兵に対する賛意の勢力と、いまひとつには、徳川家康（関東250万石）らの反豊臣勢力とを生みだす結果を導いてゆくことになったのである。

石田三成は、一方では、これらの大きな2つの勢力が豊臣「政権」の足をひっぱる事態へと動く可能性を封じ込め、他方では、豊臣「政権」の強化を図るための勢力を担う大名たち——宇喜多秀家、毛利輝元、小早川秀秋、上杉景勝、小西行長、大谷吉継らの三成派大名たち——をつくりだし、秀吉の豊臣「家」と豊臣「政権」のもとに、平和国家の実現にむけての事実上の担い手としての使命を果たしてゆかなければならなかったのである。

第3に、天下人豊臣秀吉は、宇宙=天上の「大」=「太」=「天」=「神」に与えられた使命=平和国家の実現を果たすため、天皇との融和を図ることが重要であった。そこで秀吉は、天皇家と姻戚関係を結んだ。

織田信長は、天才であるにもかかわらず（あるいは天才であるがゆえに）、「私は神である」と公言してしまった。「大」=「天」=「神」から見れば、信長の言葉は失言であり、信長の傲慢さを示していた。天道思想にもとづけば、天下人を決定するのは、「大」=「太」=「天」=「神」であるとすれば、天下人はどこまでも「公」の心としての《隣人「愛」=人間「愛」》の心を天下に示さなければならない。その意味では、信長が本能寺の変で倒れたのは、自業自得であり、まさに自滅であった。

三成にすれば、天下人という存在は、「大」=「太」=「天」=「神」に選ばれた存在である以上、「大」=「太」=「天」=「神」に見放されたら終わりである。このことは、織田信長という天才の人生を観れば、明らかである。ましてや、秀吉の眼前には、徳川家康という存在が在るのである。

家康は、秀吉の配下の地位・立場にあるとはいえ、天が天下人を決定するということを見事に見抜いていた。三成の考えでは、おそらく家康は、天が自分の生命を温存してくれたことに心より感謝し、「公」の心=《隣人「愛」=人間「愛」》の心を深く培う修練を重ねてくるであろう。

三成にすれば、天下人豊臣秀吉の天下人たる決定的条件は、自分自身が「公」の心=《隣人「愛」=人間「愛」》の心によって「大」=「太」=「天」=「神」と結びついていることであった。三成の大きな使命は、秀吉こそが「公」の心=《隣人「愛」=人間「愛」》の心を深く培い、天下万民のために自らの生命を投げだす姿勢を示し、天下人としてふさわしい人物へと育てることであった。三成の考えでは、秀吉が天下人へ就任した時から、秀吉と家康との天下人の地位をめぐる本格的な競争が始まったのであった。

4-3. 「大万」の政治思想=「政治的世界」

宇宙=天上における「大」=「天」=「神」は「北斗」=「北極星」で、自らの周りに「八

星」を有している。地上は、宇宙=天上の「大」=「神」=「北斗」=北極星と「北斗八星」の「八星」の映し絵である。

「北斗八星」の「八星」は、人間の運命や万物の生命力を支配する力を有し、北極星の周囲を一日一回転する。

『日本書紀』において、藤原不比等は、宇宙=天上の「大」=「太」=「天」=「神」は天照大神であり、その映し絵である「大」=「太」=「天」=「神」は、天照大神=アマテラスオホミカミであり、唯「一」の分身=代理人は天皇である、という見解を示した¹²⁾。

では、地上における「万」とは、具体的にいかなる内意を意味しているのでしょうか。

私説では、以上の意味内容に加えて、「万」には、「八百万（やおよろず）の神」という意味内容がある。「万」とは、「八百万の神」である、という私説の見解は、宇宙=天上に座する北斗八星の映し絵として提出することができる。

北斗八星の「八星」は、宇宙=天上の中央に座する「大」=「太」=「天」=「神」=北極星と一心同体の「天使」である。いいかえれば、「八星」は、「大」=「大一」=「神」=北極星が自らの分身として創造した「八」の「神」である、ということができる。

① 藤原鎌足が創りあげた天照信仰=伊勢信仰によれば、宇宙=天上では、「大」=「大一」=「天」=「神」であり、地上では、天照大神（アマテラスオオミカミ）であり、伊勢神宮（に祀られたアマテラスオオミカミの分身としての持統天皇の御霊=御魂）である。

② 宇宙=天上では、北斗八星といわれる「八」つの「神」は、地上では「八百万の神」である。

ここで①と②を図示すると、図1のようになる。

図1では、八百万の「神」は八つの丸印（○）で表示したが、現実には「八百万の神」が地上に存在する、と考えてよいだろう。

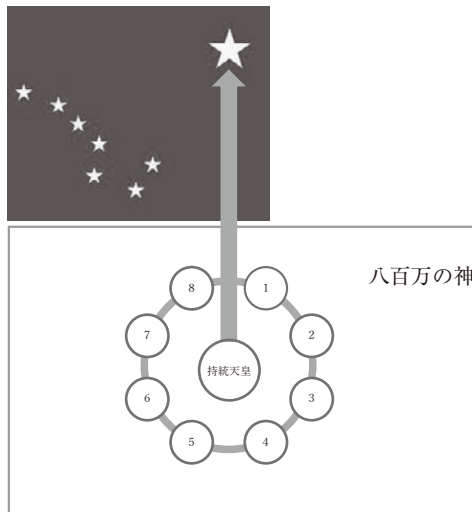
たとえば、諏訪神社の神=諏訪大明神は、信州長野の諏訪大社（秋宮、春宮）を中心拠点として現代では一万社以上の諏訪神社が存在し、その信者には何十万人、あるいは何百万人と多数の人びとが存在する。地上における「大」=「神」と北斗八星の「八」つの神とが地上における映し絵であると考えるのは、道教=神道のみならず、仏教もまた同じである。

たとえば、仏教=法華経から分かれて、空海が創始者となった真言密教でもまた、地上の「神」としての「八百万の神」は北斗八星の映し絵である、と考えていた。

こうした主張を天下に広く示すことによって、不比等は国内外の政治の安定を導く「道徳的世界」を創りだしたのであり、三成もまたそうした「道徳的世界」を自らの時代に創出することによって、「政治的世界」の安定の「八星」を図り、「経済的世界」の安定の「八星」

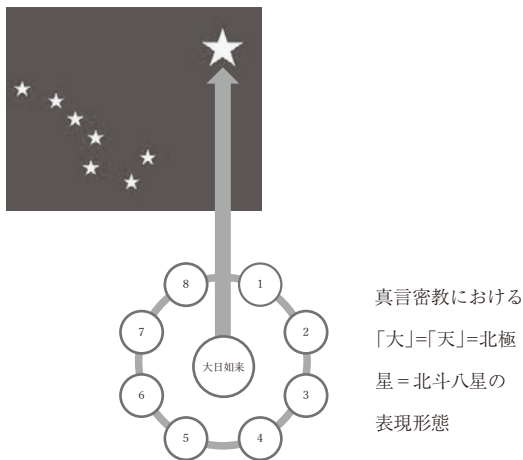
12) 天皇とは北極星である、との指摘は齋川（1999）を参照。

図1 「宇宙=天上における「大」=「太」=「天」の神と北斗八星」



- ① 諏訪大社
 - ② 談山神社
 - ③ 春日大社
 - ④ 鹿嶋神宮
 - ⑤ 香取神宮
 - ⑥ 平安神宮
 - ⑦ 八幡神社
 - ⑧ 熊野神社
- (順不同)
- ①～⑧は1つの例である

図2 「宇宙=天上における「大」=「大一」=「神」と北斗八星」



- ① 観音菩薩
 - ② 勢至菩薩
 - ③ 妙見菩薩
 - ④ 毘沙門天
 - ⑤ 普賢菩薩
 - ⑥ 薬師如来
 - ⑦ 文殊菩薩
 - ⑧ 阿弥陀如来
- (順不同)
- ①～⑧は1つの例である

を図り、「経済的利益」の増大を目指したのである。

このことを、前述の如く、図示すると、図2のように表示できる。

真言密教では、たとえば大日如来は不動明王に化身し、姿を変えて現れたり、あるいは不動明王が大日如来に化身して姿を変えて現れたり、大日如来と八百万の天使とのあいだでは、八百万のその化身は自由自在である。

逆にまた不動明王は、中央の「大」=「神」に位置する大日如来と一体化し、一心同体と

なってその力を振るうことができる。

いずれにせよ、「大」＝「大」信仰＝北極星信仰＝北斗八星信仰の事実上の創造者である藤原不比等は、宇宙＝天上の唯一の「神」としての天照大神を地上に持ち込むことによって、天照大神＝アマテラスという唯一の「神」を祀る天照大神信仰＝アマテラス信仰を広めていったのであり、かつまた「八百万の神」信仰を広め、神宮や神社を多数創り上げてゆくことによって、大自然信仰＝アミニズム信仰を広めてゆくことになったのである。

老子の思想に基礎づけられた道教は、日本では、天照大神信仰＝伊勢（神宮）信仰を中心とした大自然信仰の発展につれて神道として繁栄していった。神道＝道教は、山や海や川などの大自然の「万」物のなかに精霊が宿り、人間一人ひとりの集合体である万民の心＝魂を豊かにする、という大自然と人間との調和を説く思想であり、そこには日本人と大自然とが共生して生きてゆくことの大切さを説く大自然の思想、そして大自然の豊かな恵み（米や穀物や野菜などの食料を生み出す土地や雨などの大自然の力によって生命を生みだされる森や水など）を与えてくれる「八百万の神」を信仰する「天の思想」——「万」物や「万」民を生かす存在は「大」＝「太」＝「天」＝「神」であるという天の思想——の大切さを説く宇宙論が存在していた。

一言でいえば、神道（＝道教）の偉大さは、①絶対的宇宙論が在ること、すなわち宇宙の「大」なる「神」が地上の「万」物や「万」民＝「全て」の存在を生かしている存在であること、②地上では、伊勢神宮＝アマテラスオオミカミを唯一の「神」と位置づけて、その分身なる、一心同体の存在としての「八百万の神」が各地方に座して、その土地土地の地方の「神」として「万」物や「万」民の生命を健全に生かし、大自然の力と人間の力とを融合して共生社会を創りあげ、③そうして、天照大神＝アマテラス信仰や「八百万の神」信仰を拡大し盛り上げることによって（たとえばお祭りなどで）、人間と社会（村々など）との調和を創りあげ、ひいては国家全体の政治の安定を目指したこと、にある。事実、秀吉は三成の進言に応じて伊勢神宮に多額の寄付を行い、自らの死後は「神として祀れ」と三成に命じた。

家康は、秀吉の傘下となって以後、10年間もの不遇の時期に徳を積み重ねたからこそ「大」＝「天」に天下人としての可能性をもらって、選ばれることを明確に認識していた。家康もまた、北斗八星信仰を有していた。

三成は、「北斗」＝「北極星」と「八星」の映し絵としての平和国家中央集権国家とともに構築しようと企図した（図3・図4）。後年、家康は日光東照宮の建設を命じたが、その計画を見ると、鳥居中央から北斗八星を見渡すことができた。

図3 石田三成の旗印「大一大万大吉」に見る政治構図A

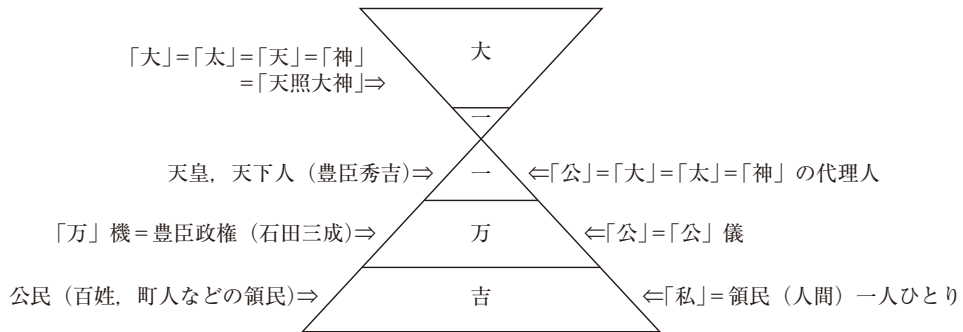
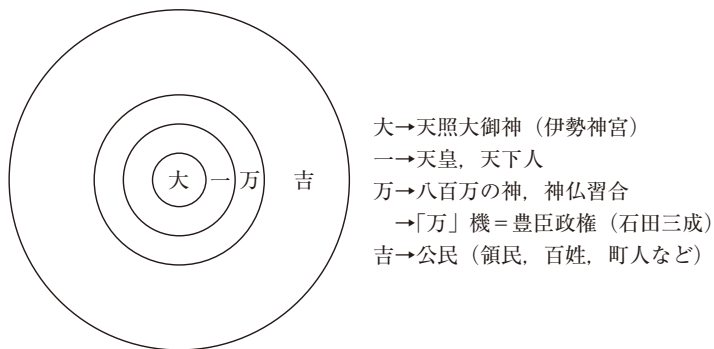


図4 石田三成の旗印「大一大万大吉」に見る政治構図B



4-4. 「大吉」の政治思想＝「経済的世界」

「大吉」とは、「大」＝「太」＝「天」＝「神」の意思（天命＝使命）を受けて、天下万民の「一」人ひとりが自らの幸福の実現を目指す、という意味である。すなわち、「大吉」とは、「大」＝「太」＝「天」＝「神」の心である「公」の心＝「無限の愛」の心を受け入れて、天下「万」民の「一」人でも「多」くの人びとが人間「愛」の心を培い、お互いの「愛」の心を施しあって幸福を実現するという意味である。

「大」＝「太」＝「天」＝「神」は、「無限の愛」の心を有しているゆえ、天下「万」民＝「全て」の人間の「一」人ひとりにその限りない「愛」を常に降り注ぐのである。「大」＝「太」＝「天」＝「神」に選ばれた唯「一」の存在としての「天皇」、そして「天皇」の代理人としての天下人豊臣秀吉は、常に「公」の心＝《隣人「愛」＝人間「愛」》の心をもって天下「万」民の「吉」＝「幸福」の実現のために政治を司る使命を担っているが、そしてまた「万」機

= 政権を預かっているが、石田三成をはじめとする奉行、各地方の武士や領民を預かっている武家の統領（領主、大名など）もまた同様であるが、天下「万」民の大多数の割合を占める領民（農民）は、自らのそれぞれの仕事を通じて精進し、「私」の心を存分に発揮して自らの利益を増やし、安定した生活のなかで自らの「愛」を家族や隣人に施してゆくことが重要な使命となるであろう。

秀吉自身の言葉によれば、「天下の百姓は、農具をもって耕作に専念できれば、幸福なのだ。これこそ、国家安泰、天下の万民が繁栄する源である」¹³⁾。

いいかえれば天下人をはじめ、豊臣政権を預かる石田三成らの使命は、「公」の心としての《「隣人「愛」＝人間「愛」》の心をもって天下「万」民の「吉」＝幸福の実現を目指し、各領主（武家の大名たち）の支配下にある領民たちが、たとえば米の収穫量の増大、生活必需品や特産物の販売などによる利益の増大といった「私」の心＝私的利益の増大を達成できるように、政治を司ってゆかなければならない。

「大吉」の世界は、社会の大多数の領民たちが、自分の生命と生活のために利己心を発揮し、自らの生活水準の向上を目指す「経済的世界」である。こうした世界が構築されてこそ、領民たちは自分の仕事を通じて《「隣人「愛」＝人間「愛」》の心を培ってゆくこともできるのである。

天照大神＝アマテラスオホミカミ信仰を中心とする「大一」の世界は、「道徳的世界」であり、伊勢信仰や「八百万の神」の信仰の社会的普及によって、人間一人ひとりがお互いに協力しあって生きてゆける共同社会を構築できる、と考えたのである。

社会的視点に立脚すれば、天下人豊臣秀吉、「公」儀＝中央政権・豊臣政権を預かる石田三成、そして各地方の各領主（武家、大名たち）は「公」の心＝人間「愛」の心をもって仕事に従事し、各地方の領民たちは「私」の心＝自己「愛」＝個人愛をもって仕事に従事し、それぞれに自らの「愛」の心を培い、隣人「愛」、人間「愛」、社会「愛」、国家「愛」へと自らの「愛」の心を広げ、「公」の心＝「愛」の心をより深く培ってゆかなければならない。

天下「万」民が自らの置かれた地位や立場に関係なく、「大」＝「天」への認識自覚が生みだされなければならない。

たとえば「私」の心＝自己利益増大や自らの地位・立場の向上を目指すことから人生を出発したにせよ、そのプロセスのなかで感動の心を発見し、自らの使命を発見しさえすれば、自らの心の奥底に宿る「公」の心＝《「隣人「愛」＝人間「愛」》の心を発見することができるであろう。

一般に人間は、恵まれた環境状況の生活のなかよりも、むしろ過酷な環境状況のなかから

13) 『豊臣秀吉朱印 刀狩条目』（大坂城・天守閣蔵）。

の方が、自らの心に宿る「公」の心＝《隣人「愛」＝人間「愛」》の心を発見しやすい、といえるであろう。たとえば、西郷隆盛は、薩摩藩主島津久光によって2度の島生活を命じられた。特に2度目は座敷牢での過酷な環境のなかで、はじめて「大」＝「天」の存在に気づいて、「敬天愛人」の思想に到達することができたのである。

自らの置かれた地位・立場にかかわらず、大事なことは、「人間の本質は愛である」という認識・自覚を有する、ということである。「愛」とは、何よりもまず「受け入れる」という意味である。すなわち「愛」とは、自らの眼の前に現れた事実（事象）や人物をありのままに「受け入れる」という意味である。

「全て」の事実（＝「万事」）や人物を「受け入れる」ことは、自分の眼の前に生じた「全て」＝「万」を「是認する」「認める」「肯定する」ということを意味する。したがって「愛」とは、第2に、「是認する」「認める」「肯定する」という意味である。

そして第3に、「愛」とは「全て」の事実（＝「万事」）や人物の存在や言動を「許す」という意味である。「全て」の事実（＝「万事」）や人物の存在や言動を「受け入れる」こと＝「肯定する」ことは、自分が気に入らないこと、受け入れ難いこと、肯定し難いことを「許す」ことによって、自らの心の葛藤を乗り越えて、「受け入れる」「肯定する」ことができるようになるのである。それゆえ「愛」とは、「許す」ということである。

第4に、「愛」とは、「自己を犠牲にする」ということである。自分の納得できないこと、信じ難いことが起きても、自分自身の使命を達成してゆくためには、時に自分の生命を危険な状況に投げださなければならないばあいもあるだろう。しかし、危険な状況に生命を投げだしてさえも、「愛」に生きる者は自分の使命を果たしてゆかなければならないのである。

したがって、第5に、「愛」とは、「大」＝「天」に与えられた使命を果たしてゆく、という意味である。人間「一」人ひとは「大」＝「天」に与えられた使命を担って世に登場して生きているのであり、その意味で人の生きる目的は、自らの仕事を通じて世に広く自らの「愛」を施してゆく、ということに他ならない。人は、自らに与えられた使命に生きてこそ、真に「愛」に生きる者となることができるのである。

上記のことをふまえて、愛の意味内容を考えるならば、「愛」の認識・自覚に到達するためには、①眼前に生じる事実や人物を「受け入れない」ことを減らしてゆくこと、つまり、「現実を排除しない」こと、②「否定しない」ように心がけること、③「許さない」ことを減らすこと、他者に寛容になることを心がけること、現実や他者を理解するように心がけること、④他者を犠牲にしたり、他者の恨み、つらみ、憎しみを受けない言動を心がけること、⑤自らの使命を発見すること、が重要な人生の指針となるであろう。

たとえ眼前の事実（事象）や人物を批判し、否定することが重要であるとみなしたばあいでも、その自らの批判否定の対象となる存在を、まずは「受け入れる」＝「肯定する」こと

によってよくよく理解したうえで、批判や否定を行い、自らが「受け入れ」た意見や理論の主張を行うことが重要であろう。

人間の本質は「愛」であるにもかかわらず、人間が互いに敵味方に分かれて激しく対立するのは、「愛」に生きることの大切さを認識自覚するに至る「知力」が足りないからであり、つまりは「無知」によるためである。それゆえに石田三成は、自らの旗印を高く天下に掲げて、人間「一」人ひとりが「愛」に生きることの大切さを広く世に知らしめようと全力を尽くしたのであった。石田三成は、理念型の政治家である。三成の政治理念は、《「愛」の政治理念》である。三成の旗印「一大万大吉」は、三成の《「愛」の政治理念》が示されている。三成の政治理念は、前原（1998）が、独自に解釈した三成の旗印「一大万大吉」の意味内容に表れており、それは、「天のもと一人が万民のために、万民が一人のために自らの生命を注げば、すべての人間の人生は吉（幸福）となる」という解釈によって明らかである。

「大吉」の「吉」とは、一言でいえば、「幸福」という意味であるが、この「幸福」という「一」つの言葉のなかには「多」くの意味が込められている。すなわち「吉」＝「幸福」という概念には、「生命」「愛」「安全」「安心」「繁栄」といった意味が含まれる。それは、人間とは「生命」そのものであり、その本質は「愛」なる存在であり、自らの「生命」「生活」の維持できる「安全」「安心」「平穩無事」とともに、自らの家の「繁栄」や国家の「安寧」「平和」を求めて生きる存在であるからに他ならない。

しかるに石田三成が自らの「生命」を振り絞り、したがってまた自らの「愛」をかぎりなく降り注いで、全身全霊を込めて自らの人生を生き抜こうとしたのは、ひとえに天下万民の「幸福」の実現という自らの使命を達成したかったからである。とはいえ三成は、秀吉が小田原征伐に勝利し、天下統一した後、厳しい試練の海に投げだされていったのである。

道教＝神道の信者である石田三成は、当然、陰陽思想を熟知していた。

前述の如く、「陰陽」思想とは、①人の人生には、「陰」と「陽」とが繰り返し生じるのであり、②「陰」＝「悪いこと」「不幸なこと」「自分が願わないこと」が生じる一方、「陽」＝「良いこと」「幸福」「自分が願ったこと」が生じる。③したがってまた「陰」＝「自分が受け入れられない嫌な事実（事象）や人物」が自分の眼前に現れる一方、「自分が受け入れられる（好きな）事実（事象）や人物」＝「自分と相性の良い事実（事象）や人物」が現れてくるのであり、それはいつどこで現出してくるのか、ある程度は予想できるが、完全には予想できないのである。

したがって「陰陽」思想に従えば、人の人生には、「正負の法則」＝「プラス・マイナスの法則」が作用する、ということである。その具体的内容は、第1に、人間「一」人ひとり自分自身のなかに「陽」（良心＝「愛」の心）と「陰」（邪心）が同時に存在すること、第2に、自分と「他」者＝「多」者との人間関係において、「陽」と「陰」との関係が必然的に

存在すること、第3に、人の人生それ自体の流れにおいて「陽」と「陰」とが繰り返して生じてゆくこと、である。この法則は、「宇宙の法則」であり、大自然の法則である。たとえば、その法則は、朝に太陽が昇って光を照らし、人の人生を明るく灯すが、しだいに夜に至ると人の人生を暗闇のなかに陥れる、という具合に進行する。

いまひとつ重要なことは、「陰陽」思想に従えば、人の人生には、「因果の法則」が作用する、ということである。ここで「因果の法則」とは「自分が他者や社会に与えたことは、いずれはすべて自分に返ってくる」という法則である。

石田三成は、藤原不比等以後、藤原氏に伝わる《「積善」の政治思想》によって、この法則を修得した、とあって過言ではないだろう。

それによって三成は、「公」の立場にある天下人、「政権」の担い手となる者は、「一人が万民のために、万民が一人のために」尽くしあうことの重要性、すなわち「公」の心としての人間「愛」を施して生きることの重要性を認識自覚するようになった、といえよう。

しかるに、石田三成は、天下万民のための天下泰平の世の構築を自らの使命とし、その使命達成のために自らを貫いて生きてゆくのである。

三成の考えでは、対外戦争より内政を優先し、中央集権国家の構築を図るほうが極めて重要である。たとえば、薩摩の島津氏の領国（領民）では、豊臣「家」による政治指導を受け入れるか否か、という問題をめぐって内部対立が生じていた。そのために三成が直々に島津氏の領国に入って検地の指導や領国経営の方法を積極的に指導した。三成は、島津氏の内部対立が容易におさまらず、不安をかかえていた。結局、関ヶ原の直前に、豊臣「政権」の指導を積極的に受け入れた三成派の陣営の指導者が反対派の陣営に殺害されたため、関ヶ原合戦における島津義弘の兵はわずか兵五百という少数であった。

三成の考えでは、豊臣「政権」の強大な軍事力を背景として島津氏の内政を善政へと導いて、島津氏に対する統制力を強化しておけば、豊臣「政権」による政治支配力は強化された。

さらにいえば、豊臣「政権」は刀狩りによって「兵農分離」を実行したが、このことは職業軍人と農民との仕事上の「分離」によって、少なくとも職業軍人という存在を創出し、生産的階級を増大させてゆくことができれば、農民による農産物の増大を実現し、経済力の向上を通じて天下万民の生活を豊かにできるはずであった。

三成の考えでは、大坂城を拠点として大都市の建設によって商業都市や貿易都市を増やし、海外貿易取引野増大や国内の流通経路の形成に着手し、商品取引の経済ネットワーク網を育成してゆけば、天下万民の生命と生活の安定が促進されてゆくはずであった。三成は、軍事「政権」と文治「政権」との両面を有する豊臣「政権」を創りあげ、天下人秀吉を高い「理念」を有する道徳的存在へと育成し、経済力を中軸とした社会国家の構築を目指したのであった。

したがって、三成の旗印「大一大万大吉」に示された《「愛」の政治思想》は、《「積善」

の政治思想》＝《「陰陽」の思想》に基礎づけられている、ということが出来る。

5. おわりに

石田三成の考えでは、①天下人が「大」＝「天」＝「神」の心としての《隣人「愛」＝人間「愛」》の心を培えば、「万」機＝「公」儀は天下「万」民のために貢献する政治＝善政を行い、②各地の政治を司る武家（領主）たちもまた、五穀豊穡を願って八百万の「神」に祈り、勤勉に働く領民を育成し、③そして領民「一」人ひとりが自らに与えた仕事を通じて、商品生産力を高め、「他」者＝「多」者との商品交換を促進し、その土地の経済力を高めて生活を豊かにしてゆくのである。

三成は、藤原氏伝承の神道＝道教を通じて、社会には「陰陽」法則としての「因果の法則」が作用することを学び取った。すなわち、三成は、人間「一」人ひとりが「他」者＝「多」者に愛を施せば、その「愛」がめぐりめぐって自分に返って幸福になるが、その反対は不幸になることを認識しえた結果、人間各人が幸福になるためには、最大多数の最大幸福を達成するためには、人間「一」人ひとりが《「愛」の理念》を有することが重要である、と識ったのである。その意味で三成は、人間各人が自らの《「私」の心》を乗り越えて《「公」の心》としての《隣人「愛」＝人間「愛」》の心に支えられた「道徳的世界」の構築こそが最も急務な課題であると考えた。

三成は、宇宙の「大」＝「天」＝「神」の「愛」を、地上＝天下では《隣人「愛」＝人間「愛」》の心に各人が到達すべきであり、天下「万」民＝人間「一」人ひとりの愛の心の育成を伊勢神宮や八百万の神への信仰を通じて実現しようと考えた。

かくて北極星信仰＝北斗八星信仰が社会的に普及・発展し、国家全体に「道徳的世界」が構築されてゆけば、安定した政治秩序（中央集権国家体制）としての「政治的世界」が形成されて、天下万民における商品の生産的階級の割合が増大し、領民の一人ひとりが自らの経済的利益の増大を目指す「経済的世界」が形成され、その結果、平和国家の構築が実現可能となるのである。

おもうに現代日本では、東日本大震災やコロナ禍の問題は、天災と人災との問題であるが、「天」＝大自然の存在に対する人間の感謝の心の欠如、《隣人「愛」＝人間「愛」》の心が欠如してしまったという「道徳的退廃」という問題と無関係ではあるまい。

人間が生きてゆくためには、人間各人にせよ企業にせよ、経済的利益を得ることが重要である。しかし、そのためには、「大」＝「天」との一体感、大自然との一体感を心がけて生きてゆくことが時代の要請であることを認識しなければならない。

参考文献

- 伊藤聡（2012）『神道とは何か』中央公論社
- 宇治谷孟（1988）『全現代語訳 日本書紀』（下）講談社
- 加地伸行（1990）『儒教とは何か』中央公論社
- 黒嶋敏（2015）『天下統一—秀吉から家康へ』講談社
- 倉本一宏（2017）『藤原氏—権力中枢の一族』中央公論社
- 五味文彦（2017）『日本の歴史』山川出版社
- 斎川眞（1999）『天皇がわかれば日本がわかる』筑摩書房
- 佐藤信他編著（2008）『詳説日本史研究改訂版』山川出版社
- 高島善哉（1968）『アダム・スミス』岩波書店
- 日本史史料研究会編（2015）『秀吉の最前線—ここまでわかった「天下人」の実像』
- 前原直子（2013）「J.S. ミルの経済思想における共感と公共性」有江大介編著『ヴィクトリア時代の思想とJ.S. ミル』三和書籍
- 前原直子（2017）「アダム・スミスの教育経済論と共感論—アダム・スミス『国富論』と『道徳感情論』との関連で—」益永淳編著『経済学の分岐と統合』（中央大学経済研究所研究叢書）中央大学出版部, 31-92頁
- 前原正美（1998）『J.S. ミルの政治経済学』白桃書房
- 前原正美（石田光成）（2012）「「大一大万大吉」に見る石田三成の《愛の思想》—一人が万民のために万民が一人のために—」『悲劇の智将 石田三成』宝島社 20-32頁
- 前原正美（2013）「アダム・スミスにおける「人間の幸福」論と資本蓄積論—《相対的幸福》論と《絶対的幸福論》との関連で—」『中央大学経済研究所年報』第44号 545-575頁
- 前原正美（2014）「石田三成の御旗『大一大万大吉』に見る政治思想—聖徳太子の政治思想との関連で—」『東洋学園大学紀要』第22号63-80頁
- 前原正美（2015a）「石田三成にみる豊臣大名の形成と豊臣共同体構想—《血と知のネットワーク》形成と平和国家構想—」『東洋学園大学紀要』第23号 71-88頁
- 前原正美（2015b）「石田三成の旗印「大一大万大吉」に見る《「公」と「私」の政治思想》と経済観—現代日本の政治経済学研究の一環として—」『中央大学経済研究所年報』第46号 51-86頁
- 前原正美（2015c）「石田三成に見る豊臣「政権」の公武合体思想と土地問題—現代日本の政治経済学研究の一環として—」『中央大学経済研究所年報』第47号 601-620頁
- 前原正美（2018a）「石田三成の宇宙（コスモス）論と政治思想—石田三成の九曜紋に示される《「九」の政治思想》 = 《「一」+「八」の政治思想》と《「大一大万大吉」の政治思想》—」『中央大学経済研究所年報』第49号567-616頁
- 前原正美（2018b）「石田三成の旗印「大一大万大吉」に見る《「愛」の政治思想》と老子の政治思想—「公」と「私」の政治思想との関連で—」『越境』鼎書房237-259頁
- 光成準治（2009）『関ヶ原前夜—西軍大名たちの戦い』日本放送出版協会
- 湯浅邦弘（2014）『入門 老荘思想』精興社
- 吉村武彦（2002）『聖徳太子』岩波書店
- 吉野裕子（1984）『易と日本の祭祀』人文書院
- 吉野裕子（1987）『持統天皇』人文書院
- 『豊臣秀吉朱印 刀狩条目』（大坂城・天守閣蔵）
- Mill, J.S. (1848) *Principles of Political Economy*, with some of their applications to social philosophy, 1848, in *Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. II-III, ed. by Routledge & K. Paul, 1965-74 (末

- 永茂喜訳『経済学原理』岩波文庫，第1-5分冊，1959-63年)
- Mill, J.S. (1859) *On Liberty*, in *Collected Works*, Vol. XVIII, 1977 (早坂忠訳『自由論』中央公論社，1967年)
- Mill, J.S. (1861) *Utilitarianism*, in *Collected Works*, Vol. X, 1969 (伊原吉之助訳『功利主義論』中央公論社，1967年)
- Mill, J.S. (1861) *Considerations on Representative Government*, ed. by Harper & Brothers, New York University Press, 1862 (山下重一訳『代議政治論』中央公論社，1967年)
- Smith, A. (1759) *The Theory of Moral Sentiments*, ed. by D.D. Raphael and A.L. Macfie, Oxford, 1976 (米森富男訳『道德情操論』未來社，1969年；水田洋訳『道德感情論』(上)(下)岩波文庫，2003年)
- Smith, A. (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 2 Vols., ed. by R.H. Campbell & A.S. Skimmer, 1976 (大河内一男監訳・大河内暁男・田添京二・玉野井芳郎共訳『国富論』I-III，中央公論社，1976；水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』(1)-(4)，岩波文庫，2000-2001年)